

小春の亡骸は槍から引き抜かれ、英一が抱えて楼閣から三人は降りた。その服装が血塗れになることも彼は躊躇わなかった。こんな得体の知れぬところで屍を打ち捨てられては彼女も浮かばれまいと彼は涙を拭って強く唱え、心配する奏美と由海を尻目にそうしたのだ。小春の身軀は余りに軽かった。多くの血と肉を失い、元より痩せ気味の彼女の力が抜けたその肉体は英一にとってこれまで抱えて来た鋸よりも大したことはないと思われもした。彼女が預かっていた魔道書は血に濡れていたが奏美が抱え上げ、代わりに持ち運ぶ。三人は廃市街から西門を抜け、跳ね橋の傍に遺体を安置してそれに盛り土をした。スコップの一つもない作業で手が土に汚れることも英一は躊躇わず、それ故に奏美と由海も黙々と、真摯に行った。その全身が埋まった頃、朝焼けの明るさを三人は感じた。同時に疲労と眠気もどつと押し寄せる。だが幾ら何でもここでは寝られない。三人は来た道を引き返し、西の楼閣一階へと戻ってその休憩室に転がり込んだ。英一は二人を優先して休ませようとしたがこれを強い調子で奏美が拒み、英一こそがまず先に寝ることを求めた。

「英一くんが一番頑張ったんだよ。あの化け物との戦いだって、これまでだってずっとずっと！」

「でも俺は……小春ちゃんを……」

「それでもだよ！」

尚も服が他の二人より余程汚いから寝台を汚すことになる等と御託を並べていた彼を奏美は無理矢理部屋に押し込んだ上で由海共々自らも同室した。そこにはこの期に及んで何か来ると云うなら一蓮托生だと云う強い意思が彼女にあった。それで三人は眠った。泥の様に。この悪夢の如き今を一瞬ばかりでも忘れた顔をして。……

小春と云う子が美術部の見学に来た時、連れの女子らがあまり乗り気ではなさそうな雰囲気をしていたこともあってか彼女は話を聞くべき相手にも困っていたものだった。それを見た奏美がずっと席を立てて小春の元へ赴き、この二人の友情が始まったのを英一は覚えていた。決して長くはなかったが麗しい、仲の良い先輩と後輩の間柄。英一はその奏美がいつも隣にいる相手の一人と云う形でまず小春に顔を覚えられ、彼女が部内で直面する出来事について度々手を貸す間柄だったと言えた。然して強く意識したことはなかったが、英一と云う少年もまた小春にとっては友達と呼んで差支えがなく、そうした親しみを込めて彼女が穏やかに、だが楽しそうに先輩と呼んでいたものだった。たまたま月子が隣にいた時は少し面白そうに自分を肘で小突いてきたこともあった。英一にとっては、少なくとも当時はそう扱われることに気恥ずかしさは否めなかったものだが。とは云え英一と小春はやはり学年が違うので基本的には行動を共にしておらず折々に顔を合わせる部員の一人であり、差し当たりこの合宿の帰り道までは小春にとってもそうしたありふれた上下関係と交友の範疇にあったことであろう。或いはそれがどれ程幸運に恵まれたものであるか、何事もなければ相互に意識することもなかったであろうが……。

学園にあってはクラスの違う奏美よりも同級生の月子が、美術部にあってはテニス部の為に時々留守にする月子よりも奏美の方が英一と行動を共にすることの方が多かった。英一にとって美術部は何より奏美の頼みで入った訳だが、父親からは始めたからにはやり通して文武両道を体現せよとスパルタな教育方針を与えられていたこともあり美術部員として真摯に努力した。才能のあるなしで言えば英一よりも專業たる奏美や、よりこちらに時間を取っている暇の少ない筈の月子の方がデッサンにしろ何にしろ上手かったのが皮肉ではあったものだが。それでも、人に助けられ人に教えられる程度にはなった。彼の学生生活にとってこの部活動は充実した日常の一部であり、そこで出会った人々に感謝を思い抱いていられる程度には幸福なものだった。自分が後輩を持つ立場になった時そうした認識

はより強く思い抱かれ、英一はそれ故に後輩の指導・支援にも熱心であると云えた。ああ、このような幸福が、ただ人々の卒業を除いてどうして崩れることがある？　なにゆえにそれが断ち切られることがある？　誰が、その様なことを望もうか？

英一は目を覚ました。仕舞われていたスマートフォンが着信音を鳴らしながらバイブレーションをしていたが為に。半ば驚いて目覚めた彼はしかし、それが何故鳴っているのかと疑問に思った。時間感覚が曖昧な上充電も出来ていない筈のそれが今に至ってどこかに電波が繋がりと、連絡を付けようと試みている相手でもいると云うのか？　周囲の二人もその異音に眠りを遮られて目を覚まし、取り出された彼のスマートフォンをどこか奇異の目で見る。英一はやや覚束ない仕草をしながら画面を見た。発信者は霧海月子とあった。

「もしもし、葦杜？　おれだよ、瑚潑紹！　お前の連絡先そういう持ってなかったから霧海さんからスマホ借りただけだよ、元気にしてっか？」

その声はやけに陽気で呑気にさえ響き、あまりにも場違いだった。それだけでも通話者たる英一とその声が漏れ聞こえるのに耳を澄ませる奏美たちには不吉に思われた。……何故だか妙な物音と、人が息を吐く声が聞こえる。何かを擦り合わせている様な音、いや、叩いている様な音？

「え、あ、ああ、いや、こっちは大変なことになって……その……」

「大変なことお？　そりやまた難儀だなあ、どうしたってんだ？」

一々軽くどこか馴れ馴れしくさえ思える口調で紹は応じた。……英一と紹は美術部から離れるとそれほど付き合いない間柄だった。同学年ではあるが同級生であったことがない。どちらかと云うと体育で他のクラスと合同で何かすると云う時に運動部たる彼と協力したり敵対したりしてその関わりでお互いを覚え合ったと云う向きが強かった。部内で英一が話し掛けると、不思議と二人は弾まず紹が英一の傍らにいる奏美なり月子なりに一瞥を与えて話は何となく途切れる、と云うことの方が多かったものだ。他方で紹は他の部員共々に英一の女性関係について弄ることは然程躊躇いを見せない。この不均等は、或いは嫉妬なのではないか、などとは英一は善良にも考えたことがなかった。そもそも彼にとって奏美や月子の存在は羨まれる交際相手ではなくこれまでの人生と日常を構成してきた欠かされざる仲間と云うべきところだったのだから。

「えい、いち……？」

微かに月子の声が電話口から聞こえた気がした。それを聞いて英一ははっとし、また嫌な符号に気付いた。息を吐くような声の主は月子のそれだった。いや、正確にはもう一つ低い声が混ざっているのだが……。英一の胸中に不穏と緊張が膨らみ続け、彼は続ける文句を浮かべ損ねた。そこへ紹が間を塞ぐように続ける。

「あー、まあ語りたくないってならわざわざ言わなくていいや。どうせおれらまで鬱になるだけだろうからね」

「や、いや、そんな軽々しい話じゃない、小春が」

「小春う？　おいおい葦杜、お前いつの間に名賀搗ちゃんとそんなイイ仲になったわけ？　羨ましいねえー。そうだろツネヒー」

「でっすねー、遂に、ンッ、普段はおとぼけが利いていた葦杜先輩にも春が来たなんて妬けますねえ。幾ら女子いっぱい我らが道道学園美術部だからって」

やや離れたところから常人が応じるのが聞こえた。その軽薄さは、その温度差は英一に焦燥と苛立ちを募らせるに十分だった。彼は傍らの二人が微かに驚く程に強く怒鳴った。

「お前ら、いい加減にしろよ！！　名賀搗さんが化け物に殺されて、こっちは参っているんだぞ……！」

「えー、死んじゃったの？　そりやあ……うん、ツネヒーどう思う？」

「カワイソーとは思いますがどねえ、でも小春ちゃんこの面々じゃ一番持たなさそうだったし。早めに死ねてむしろラッキーだったんじゃない？」

「ハハハッ、違えねえや。こんなところでいつまでも苦しむよりはぜってーそうだよなあ」

当然の様な調子で冒流を口にする二人に英一のみならず奏美と由海も怒りと、その異様さに対する恐怖を感じた。この二人は既に狂ってしまったのかもしれない。何が故にと、云うのは野暮なことだろう。英一と奏美は夜の城壁で月子たち三人と再会した時のことを思い出していた。あの時の余裕のない切羽詰まった紹の様子。常人の前途への望みを抱けない悄然とした姿。それらの行き着いた先がこれであるのなら人間は如何に信用ならぬ、道理と倫理をかくも容易くかなぐり捨てることの出来る存在であろうことか。最早希望を抱かぬが故に他者を愚弄し、せせら笑って自分たちのその刹那の娯楽に供することを躊躇わぬ有様は英一に齒嚙みをさせた。

「えい、いち……生き、て！ にげて！」

月子が振り絞る様にそう口にしたのが微かに聞こえた。それを最後に電話はぷつぷつと切れた。見れば電池切れとある。むしろとくに切れて受話出来なくなっていて当然だったのではないかと、と英一には思われこそしたが枝葉末節の疑問に過ぎなかった。三人は互いを見やりながらも口にすべき言葉に迷った。それ故の沈黙が一室を暫く支配した。しかし三人には共通の理解があった。月子の境遇に対する口にすべからざる予想、ことに身綺麗で善良な少女である奏美などにしてみればそれはおぼろげな、しかしおぞましい予見なのだった。だが少なくとも紹と常人をその様に駆り立てさせたのはあの夜の城壁において何も渡してやらなかった自分たちにも責任の一端があるのではないかと英一と奏美には思われた。あの時求めに応じて奏美が持っていた角材を何とか投げ渡してやれば、多少はあの二人の心境にもまじな結果を与え得たかもしれないのだ。武器としての価値自体よりも、自分たちは仲間に見捨てられていないと云う事実を感じさせること、それによって希望を、微かにでも望みが残っていると感じさせるために。だが全ては後の祭りだった。この上あの角材がなければ英一も危うかった上に奏美は死ぬかもしれないなかった場面を思い返すと、全く彼らに手など無かったのだろうとしか思われず二人はただ痛恨の表情と共に沈み、この二人の懊悩を由海が察してその肩を持ってやることしか出来なかった。

三人が支度を整えて休憩室から出ようとした時、扉が外から開かれようとした。その扉は三人が入る際に鍵を閉めてあったので開かれず、ガチャガチャと音を立ててノブが回された。英一は努めて冷静に声を投げ掛けた。

「誰だ？」

「その声……葦杜、先輩ですか」

京典のどこか訝し気な声が返って来た。一瞬英一の脳裏に今まで何度か出くわした偽者がこの扉の向こうに立っている可能性を思い抱かせたが、奏美も由海も敢えてそれを疑って扉を開かないことを望んでいない様子だった。それで彼は鍵を開けてその顔を確かめた。京典は疲弊の色も顕わだったが、それ以上に何か急いている様な印象を与えた。

「ここまで来たのは、あの小屋で休むのはもういいってことなのか？」

「もういいも何も、甫土先輩が上がり込んできても休めたもんじゃないよ。どうなってるんですかあの人、目が人殺しそうなぐらいギラついてるんですよ、やってられませんよ」

「え、あ、ああ。しかし……そうすると十慧先輩は？」

「は？ 十慧先輩？ 見てませんよ。仮にいたとしてもあんな甫土先輩がいたら向こうから避けて通りますって。それより」

「……何だ？」

「こ、……名賀搗、さんは？」

後ろで寝台に座っている奏美と由海が明らかに悲し気に目を伏せた。英一はなるべく感情的にならぬ様に努めながらも伝えるべきことを伝えねばならなかった。

「小春ちゃんは……名賀搗さんは、死んでしまった」

「……」

「ええと……すまない。同学年相手のことでこんなことを伝えなきゃならないのは酷だろうけど」

「そんな気が……してたんですよ、跳ね橋を渡る辺りに誰かが埋められてたのを見てから。……お前が、お前らが、小春ちゃんを殺したんだろ!!」

「違う!」

「違うもんか! お前らが不甲斐無いから! お前らなんかについて行つたから!! 何でだよ、先輩今小春ちゃんって呼んだよな!? ぼくの方が先に好きになつたんだぞ、横取りしようとしたのかよ!」

この京典の不当な激昂を相手にしても英一はただ申し訳ないと云う表情を変えなかった。彼の論理に正しさを認めたからではなく、己が小春を守り通せなかったと云う端的な事実を糾弾されるまでもなく今も引き摺っているからであつた。だがそれさえ京典には知り得ぬことだつた。彼は早口に捲し立てて英一の襟元を掴んだ。

「何でだよ、何で小春ちゃんが先に死ななきゃいけなかったんだよ、先輩たちは何をやってたんだよこの野郎、何とか言えよ!」

「すまない……俺の力不足だったから……」

「うるせえよそんなことは分かつてるんだよ、謝れば小春ちゃんが生き返る訳じゃないのにそんな言い訳聞きたくないんだよ!!」

「多洪くん、止めて! 英一くんは必死で頑張つたんだからこれ以上責めないで!」

「やめてくれよそんな言い草、瀬之川先輩が元々こいつとくつついてるみたいなんだったのに小春ちゃんを殺しやがって、ぼくはどうすりゃいいんだよこれからあ!」

「多洪君、どうか落ち着いて……」

「うるさい、うるさいうるさい、うるさーいッ!」

喚くだけ喚いて京典は走り出した。三人はこれを追おうとしたが、まず英一がその無意味さ、己の無力感到苛まれてこれを諦めてしまった。……そもそも、京典と云う少年が小春の何だったと云うのだろう? 内向的と見られたこの一年生は同じく内向的な印象を抱かれた小春と同じ美術部にて出会つた訳ではあれ、両者に積極的な会話や接触があつたと云う認識を三人や他の部員は抱いた試しがなかった。そのシャイな、如何にも初心なまでの好意を小春が認識していたことはとても言えるまい。仮にあつたとして、この遭難に至つて彼が小春に何をして見せたであろうか。バスの前で焚火をしていた時でさえ小春が食事を共にしたのは彼ではなかったものだ。それ以後も彼女と行動を共にし、叱咤して小春と云う人物に巢食う弱気の鳶を除いて行つたのは英一や奏美の方に他ならなかったのだから。或いは、正にそうした『何もしなかった』と云う事実こそが彼の精神を蝕み、英一たちに八つ当たりの罵詈雑言を投げ掛けさせたのかもしれない。

英一たちは多少気持ちが悪く着くまで休憩室から出なかった。その後、いの一に奏美が二人を促すように立つて音頭を取つた。そこには自分が英一に、また小春や由海に助けられてばかりいると云う認識が窺われた。改めて探索を進める前に三人は一階に残された食糧で多少の腹ごしらえをした。と云つても、その塩辛い保存食は限られた水のことも思うと多くを食べる気にさせるものでもない。飢えるよりはむしろ、本当ならもっとちゃんとした、家のご飯が食べたいものだ。三人は望郷の念よろしく家に帰りたいと夙に思つた。食事を終えた後、彼らは三階へ再び登つた。二階はともかく三階は乾いてこそいるが血塗れのままでその陰惨な光景と記憶はとても直視し難いものであつたが、この階を調べずに済ませる訳にも行かなかつた。三人は手分けをしてそう広いでもない――あの靄に包

まれていた空間はこうも狭くはなかった筈だ——階層を調べて回った。本棚やら机やらがあるがそれらに変わったものは見受けられない。しかし一ヶ所、変わったものがあつた。祭壇らしきものが東の壁面に飾られていた。祭壇には取っ手が付いており、しかしそれは古びた紐で結ばれている。英一は鋸では大きすぎると思つたところ、奏美が鞆から小さな鋏を取り出してこれを切つた。取っ手を開いてみると、中にはスイッチらしきものがある。三人は顔を見合せて一つ頷くと英一が慎重にこれを押した。すると下の階のどこかで何かが動く音が響いた。三人は二階、一階と降りたところ床の一つが外れて隠し通路へ続く鉄梯子が見つかった。

「これが月子ちゃんの言つていた地下通路への道……かな」

「たぶん、な」

「行くしかない、ですよ」

「そうだけど……」

英一は去つてしまつた京典のことが気掛かりだつた。これから彼が一体どうするのか、どう生き延びるのか心配していた。あれだけ誹られてもまだ他人の心配をするその姿に奏美は英一を嬉しそうに見る。ああ、やっぱり英一くんはずっと優しい人だな。そう思いながら奏美が由海に視線を移すと、そこに映つていた顔はどこか緊張しながらも浮かない印象を漂わせている。不安の種ばかりなのは分かり切っているが、それでもどこか奏美には引つ掛かりを抱かせた。

「あの、楚さん」

「え？ あ、何？」

「その、何か心配事とか、あつたりする？」

「ああ……やっぱり分かっちゃうかな。その、私、あんまりいいとこないまままだよねって思つて」

「そんなことないでしょ」

「でもその……葦杜君には瀬之川さんや名賀搦さんがいた訳だし、私ははぐれたり足を捻つたりして色々迷惑を掛けているし。それに何より……あの騎兵みたいなのに、何も出来なかつたから……」

こんな風な不安は実にらしいと云うものだろう。横でそんな話をされていたのを聞いた英一も奏美と歩調を合わせる様にして由海を慰め、激励した。それに由海も少し安心し、絆されて勇気付けられたものだが。それ故に当初の軽率な色仕掛けの悔恨がどこもなく彼女の意識に擡げてきて二人の目を見て感謝を述べる事が出来ないのだった。

地下通路には当然と云うべきだが明かりがなかつた。まだライトの電池は持つらしいが視界の利かず退路も乏しいここで長居はしたくないと英一は思う。……地下通路の作り自体は割合しつかりしておりただの洞窟などではなく石積みで壁を補強し床面を敷き詰めた実用的な作りであつた。こう云うものであれば、方向感覚さえ見失わなければ恐らくあの城郭まで辿り着けるのだろう。或いは他の出口にも繋がっているかもしれない。出た先で誰かしらと合流出来れば少しは心理的にも安堵出来るところであろう。

「でも……瑚潑くんたちとはあんまり会いたくないよね……」

奏美がぼつりとこうこぼした。由海がまず彼女をみやり、労わる様に同意の首肯を与えた。英一は苦々しい顔をした。電話口に出た彼はその時こそ理解が追いつかない衝撃に困惑していたが、彼が三人の中で一番確かに月子の声を聞いたが故に時間が経つにつれその情景を想像してしまつたのである。あまりにも淫猥で不徳な、この幼馴染が身を引き裂かれるような辛苦に苛まれている情景。彼は年端も行かぬ子供の頃ぐらいにはうっかり月子の裸の胸高だとかパンツだとかを見てしまったこともあつて、そう云う時の彼女はとても気恥ずかしそうにそうした姿を隠して『見ないで』とか『忘れて』とか、今にしてみれば愛らしい羞恥を以て彼に接して来たものだった。言い換えればある程度性徴を経るに至つた後の彼女の姿は精々水着ぐらいでしかその肌身を見たことがなかつたのである。そこまで

考えるに、英一はその様な邪悪の情景に対する解像度が低かったのと同時にそれを考えること自体に對する道徳的な自己嫌悪を催して落ち着けなかった。嫌な話だが猥褻な妄想に對し己の男性器は正直でもあり、今この二人の女子と行動を共にしている間その生理現象をなるべく気付かれないことを心密かに祈っていた。この場の暗さはその一点においてだけ慰めになったのだが。

かつり、と足音がした。自分たち以外の足音。それはすぐ手前の曲がり角より近付くものだった。誰かが近いことを示すそれに、三人はそれぞれの想像を膨らませながら緊張を帯びて一度止まった。ライトは点けたままである以上相手に認識出来ていない筈がない。近付く足音に己の心音もまた速く、大きく響くのを三人は感じた。

「よお……三人とも……」

出くわしたのは正に紹と常人の姿だった。そこに月子が続いていないのは何の符号だろうかと一瞬英一は疑った。

「こ、瑚潑くん、それに那於巴くん……」

「生きてたんだなあ……嬉しいなあ……」

「なあ葦杜。おれお前に、助けてくれって頼んだよな？」

「あ……ああ」

「助けてくれって頼んだのに、何もしてくれなかったよなあ？ おれたち、そこからどうしたと思う？」

「せんばーい……オレら、さあ……決めちゃったんだよねえ……あんたたちに、死んでもらうってさア！！」

どろりと、二人の姿が溶けた。その顔、その皮膚、それらが崩れる様に溶けて人の形をした化け物に成り代わると、耳を劈く奇声を上げて二人は襲い掛かって来た。悲鳴を上げて屈み込んだ奏美とそれを底う様に姿勢を崩した由海に代えて英一は決然と鋸を構えて立ちふさがり、襲い来た二つの化け物をその鋸で引き裂いた。錆びた鋸を力一杯に振り下ろして肉を引き裂き骨を押し折ると、常人の姿だった化け物は瞬く間に崩れ落ちて黒い灰に変わりそれも跡形なく消える。紹の姿だった方は一度英一の胸倉を掴んだが、英一は空いている片手で即座にその頭に鉄拳を叩き込むと相手は血とも泥ともつかぬ液体を吐瀉して英一を解放した。直ちにそこへ英一は鋸を叩き落とした。胴体を薙ぐ様に打ち下ろされたそれは化け物を引き裂き、やはり黒い灰に変えて消し去ってしまった。……息粗く英一は奏美と由海を見る。二人は腰を抜かしたままに彼を見上げて、当座の危機が去ったらしいことをおっとり刀で認識するとたたらを踏みながら立ち上がった。

「あ、ありがとう葦杜君」

「ねえ、あの二人って……瑚潑くんと那於巴くん、だったよね？」

「ああ、そんな風には見えただけ」

「もしかして、二人とも……死んじゃったの？」

仮にそうだとするとこの短時間の内に英一は見知った顔を二人も殺したと云うことになる。英一はその一言で遅まきに気付き、愕然とした思いを抱いた。期せずしての正当防衛であれこの窮地に団結すべき仲間を手に掛けたことは彼の内心に急速に罪悪感を醸し出させた。あいつらにはこの場に至って何もしてやれなかったのにその挙句殺す様な権利なんて俺にあるとは思えない。彼はびくり、びくりびくりと震え出した。余りに恐ろしく罪深い行いを働いた事実英一はショックを受けて今にも泣き出しそうであった。奏美がそれを見て自分が失言したことを悟り、速やかに駆け寄ってその肩を持ちながら慰めを試みようとした。

「なーあ……？ お前らさ、おれらをこんな程度で殺せると思ったかア？」

人は恐懼した。揃って震え上がり、それによって自らの罪の意識が吹っ飛んだ英一が叫んだ。

「逃げる！！」

三人は前へと逃げた。その後を化け物に転じたその面々がぞろぞろと、いたぶる様な哄笑を上げながら追って来る。最早方角だとか道筋だとか考えている余裕もなかった。三人はがむしゃらに走って、息の切れる程に全力疾走した。何度も分かれ道を経た様に思われるが揃ってまともに数えたり覚えたりなどしていない。この追いかけっこの行き着いた先に出たのは、広間を思わせる空間だった。そこで奏美が躓いた。倒れる彼女を英一は助け起こす。その背後より迫って来る化け物たちは奏美を足を掴まんと手を伸ばしたところ、ばかりと見えざる力に弾かれた。それどころか化け物らはその見えざる力に阻まれ、触れたそばから溶けて消えて行く。三人は殆ど茫然としてその光景を見ていた。追っ手が全滅したのを見届けて漸く三人は生き返ったような心地になった。それが何なのかよく分からないうが、差し当たり助かったらしい。英一は恐る恐るライトで出た先を照らした。そこは広間を呈していた。真ん中には一本の太い柱が見られるが他には幾つかこの広間に通じているらしい通路の他に何もなかった。三人は疲れていたが為に一度その柱に寄り掛かって休憩した。お喋りが弾むでもない、残り少ない水を口にするだけの休息。本当に自分たちは生きてここから出られるのかと思わされたが、とにかく息を整えて何とか道を探すより他はないことも違いなかった。……ライトを切って真っ暗闇の中でただお互いの存在だけを感じ合う休息は不気味であることも違いなかったが、しかし不思議な安心感を覚えさせた。英一を挟んで奏美と由海が両脇に座っているのだが、どちらも彼の手を握っていた。暗闇の内にあつてはその感触ばかりは間違いない様に思われ、お互いが静寂の内に残す呼吸の音もまたお互いがまだ生きていると云う事実を認識させた。闇をこれ程恐怖に駆らせた経験ばかりの中で逆にこうまで感性を研ぎ澄まされている感覚は不思議なものだった。

「英一くん」

小さな声で奏美が呼び掛けた。英一のみならず由海も自然と彼女の方を向いた。誰にしてもその顔が見えない筈でありながら。

「わたしたち、生きているんだね。何度ももう駄目かと思ったけど、まだ生きているんだよね。……きつと、きつと生きて帰ろうね。楚さんも」

「ああ」

「ええ」

そこから沈黙が支配した。その沈黙は三人を緩やかに眠りへと誘った。

起きた時英一は瞼を開いても視界が真っ暗なことに一瞬だけ疑問を抱いたが、直ぐにこの場が光一つないらしい場所であることを思い出した。幸いなのか、両手の感覚は未だ二人の手を握り締めている。もぞ、と傍らの奏美が動き出した。そちらも目覚めたらしい。

「起きたか、奏美？」

「あ……うん、眠れた？」

「まあな」

夢らしい夢を見ない眠りと云うのも彼にはどこか久しく思われた。……由海はまだ眠っているらしく小さな寝息が聞こえる。それを微かに微笑ましく思ったものだが、一方でこの無防備だった時間は如何にも誰か別のものとすり替えられているのにお詠え向きだったことだろうとも思われた。傍らのどちらか、または己が知らずして全く別のところに飛ばされてのうのうと何者かが居座っている可能性。英一はそこまで考えはしたがあまり信じたいものではないと思った。希望的観測ではあれ、この場の二人が今まで出くわして来た怪物としてすり替わっていたりするなどあつてはこちらの心臓が持つまいものだ。その手に握ったライトの明かりを点けた時、照らし出された姿が化け物ではないこ

とを保証するのはただ自らの虚妄の様な信頼だけと云う心細さを内心で抱えながら、彼はまず自分を照らす様にライトを点けた。

「あ……英一くん」

その反応を見るに少なくとも自分は何も変わっていないらしい。微かに安堵して（そもそも己が化け物かもしれないと云う妄想を抱くこと自体が異常に傾いているのだが）、英一はライトをゆっくりと奏美の顔を照らす様に向けた。……その顔は泥で出来た様に崩れていた。

「！！」

……彼が叫んだ時、自らが覚醒したのを感じた。それは夢だった。脂汗を掻いていることを英一は自覚しつつ、握られた手の感触を確かめる。二人ともまだ眠っているらしい。眠っていることを認識することで彼は、さっきのはただの夢だったと自分に言い聞かせる十分な理由、十分な理屈が生じたと思った。こんな夢を見るのはこんな異常な空間に何日も閉じ込められて精神が参っているからだ、と彼は努めて自分を叱咤した。今度は先に立ち上がり、ライトを付けて辺りを照らし出した。それは周囲に妙なものが近付いていないか確かめる意味でもあり、目の前にいきなりまたさっきの様な崩れた顔を見ては自分の心臓が持たないと思われたからでもあった。ライトに照らされて奏美はその眠りを妨げられたことに唸りながら瞬きを見せる。幸いなことに今度こそ見知った彼女の顔であった。

「うん……英一、くん……起きてたの……？」

「悪い、よく眠れなくてさ」

軽く詫びながら英一は由海の方もまた同じ様に確かめた。こちらも見知った当人の姿見のままで、英一は内心深く溜息を吐く様に安堵を抱いたものだった。遅れて由海も起き出し、三人は次にどうするかを話し合った。この地下通路にはなるべく長居したくない。しかしどこへ出るとも知らない通路を選んで進んでも月子たちとの合流を果たせるか分からないだろう。それで、内心恐ろしくて仕方ないが一旦来た道を引き返すことにした。もしまたあの化け物共に絡まれたら？ それはどこを進んでも同じだ、と思われた。見覚えのある道まで何とか出られれば、少しは打開し得るだろう。かくして三人は恐る恐る、また地下通路を歩きだした。

地下通路は三人の足音以外は専ら静寂が支配していた。今度は先程の様な化け物とも出くわさず、三人は幾度かの分岐路に面したがこれは古典的な、片側にひたすら偏って道を選ぶ寸法でともかくも突き当たる先を目指す。……道すがら、ふと奏美が口を開いた。

「ねえ、今……何か滴る音が聞こえなかった？」

「え？」

「あ……そう云えば、あっちの方かな」

ここまでほぼ自分たちの足音以外何も聞いて来なかった為にその音は存外よく通るものと、いざ耳を澄ませて聞こえて来た音をして英一は思ったものだった。それで三人は水音のする側へ道を変えた。やはり暫く歩くと、そこには水路らしき空間が広がっていた。整備された空間は下水道を思わせだが、水面に触れられる高さまで階段が設えられておりそこへ下った三人はこれを照らして変色していないことを確かめると、率先して出た由海が掬って少量口に含んだ。

「大丈夫だと思えます。これ……飲めそう」

「そうか！」

水筒やペットボトルの中身は残り僅かであったことを思うとここで水を補充出来るのは嬉しい誤算と言えた。仮に下水道であったとしても、地上の人気の絶えた市街地や城郭の様子から見ても長らくその用途として使われていないのだろう。或いは彼らの見立てが下水道を思わせただけでここは元来そこで暮らしていた人々が城塞都市に籠城する際の水源であるのかもしれない。それで三人は残り

の飲み水を一旦飲み干して、この水を詰められるだけ詰め替えた。本来なら煮沸消毒までしてやりた
いが、それをする為の鍋の如き器がない以上やむを得ない。いっぺんに多量に飲まない様にと奏美が
注意を与える姿はこう云うところで女の子は頼もしいものだと思わされた。そうして上がって来た彼
らは自分たちが進んで来た道を何気なく照らして人影を見付けた。その瞬間に三人に相手は誰であ
るかを認識する前に緊張が走った。最早ここで出会う相手は誰であつてもまず警戒せねばならないと思
われたが故に。

「あ？ あんたたち、こんなトコで何やってるわけ？」

その声、その姿は百香を思わせた。もう随分会つていないままとさえ思われる彼女の、敢えて言え
ばそのままな言動は英一に直感を抱かせた。それ故に片手に握っている鋸を持つ手が握り直される。
目敏く相手はこれを認めて不機嫌そうに続けた。

「何よその物騒なものは。まさかそれでアタシを切ろうつても思ってるの？」

「……」

「何とか言いなさいよ」

「あのー……百香ちゃん、だよね？」

「それ以外の誰に見えるってんの？」

「なあ、千ヶ嶽さん。他の三人はどうした？」

「はい？ あいつらはどっか行っちゃったわ。このアタシを置いてけぼりにして、サイテーよね」

「本当に？ 瑚潑と那於巴とは少し前に会ったけど、お前のことを尋ねたら露骨に嫌そうな顔をして
いたぞ」

「は？ アタシが何をしたつてのよ」

「……月子についても、心当たりはないんだな？」

「当たり前じゃん！」

その苛立ち顯わな返事を聞いて英一は二人を庇う様にして前に立った。奏美と由海はどこか不安げ
にその様な彼を見るが、英一は躊躇わなかった。

「俺は月子とも話をした。だから言うが、お前と月子の言だったら俺は月子の言ったことを信じる。

月子は、喧嘩になってお前の方から抜けたと言っていた。……お前は誰だ？」

「アタシは千ヶ嶽百香よ、何で疑う理由があるのよ！？」

「悪いけど別の道を探してくれ、俺たちに付いて来るな」

この様な言を投げ掛けるのは当然幾許か良心の呵責を覚えるものだが、その苦しみを二人には背負
わせるまいと彼は決めていた。少しだけだが彼にもこの辺りの理屈が分かり始めていた。殊更そく
りの紛い物が度々出沒し自分たちの命を狙って来るこの一帯。騙されたくなければ、感じた違和感を
決して手放さずに突き放すしかない。……百香らしき相手はこの英一の態度に幾許か不平を鳴らして
いたが、不意に嗤った。不気味な嗤いをこぼしたことに奏美と由海がわずかにびくりとした。

「あーあー……アタシを信じて貰えないなんて、サイテーな奴になったわね。じゃあ、虐めちゃつて
も別にいいよねェ！？」

やはりと云うべきか、百香の姿はどろりと崩れた。しかし驚くべきは、その姿から俊敏に飛び出し
て彼を強かに一撃喰らわせたことである。先手を取られてよろめいた彼が百香らしき化け物を視界に
捉え直した時、それは由海に喰い付いていた。

「楚さん！」

「あ、あああ……！！」

「どーせだからアンタを連れて行くわア、奏美ジャすぐ死んジャいそうだし！？」

化け物は由海を抱え上げると、水面の上を跳んだ。跳んだ先にも通路があつて、化け物は崩れた百
香の顔でせせら笑う様に舌を出すと素早く駆けてその先にある通路へ姿を消した。……あつという間

に過ぎ去った出来事に二人は呆気にとられ、数秒そうして固まっていたが水滴が滴る音があると英一は不意に意識が眼前に戻り、奏美を見た。その仕草に釣られる格好で奏美も英一に向き直った。

「どうしよう、楚さんが……！」

「早く助けに行かないと……でも、向こう側は泳ぐしか辿り着けなさそうだ」

「わ、わたし、泳ぐの下手だから……ごめんなさい……」

「いや、それを謝らなくていいよ」

元より全身ずぶ濡れになってまで向こうへ渡ったところでどうすると云うところもある。英一の持つ鋸などは泳ぎには圧倒的に重くて邪魔になる以上置いて行かざるを得なくなり、素手であの手の敵を相手する羽目にもなるだろう。到底どうしようもないことを考えるとこの場合は道なりに進む以外手が残されていなかった。英一は頭を振った。何と無力なことであろうかと。どれ程に死力を尽くしても翻弄されるばかりの自分は果たして由海を助けることが出来るのか。また奏美を守り抜くことが出来るのか。全く自信を奪われる限りであった。奏美は落ち込む英一に寄り添い、少しでも彼が意気を取り戻してくれるよう背中をさすった。それが少しこそばゆくて英一は変な声が出てしまった。

「うひゃあつ」

「……ふふ、英一くん、頑張ろ」

英一が少し重圧を抜かれたのを見て奏美が微笑んで、ふと気が付いた様に床を見て屈む。奏美は刈り取り鎌を拾い上げた。これまた由海が取り落したらしい。奏美が持っていた角材は折れて武器としては大分頼りなくなったことを鑑みるにこちらの方が無いよりは余程良い。奏美は努めて笑顔を作って通路の先を指さして先導した。英一は慌てて彼女の前に立って歩いた。その彼の腕に奏美が優しく抱き着く。

「こうしてないと、いつ別の何かになってるか分からないから……」

こんな風に奏美がこぼしたので、英一も気恥ずかしかうとこれを止めるよう言うのは憚られた。二人は由海のことを思うと歩みが早まり、早足で通路を進む。その通路の突き当たりに鉄梯子らしきものが照らし出され、二人はその上を見上げた。塞がれている天井。力任せで開くだろうかと英一は考えたが、奏美が周囲を手探りで確かめると取っ手らしきものがここにもあることを確かめた。それを開くと内部にレバーがあり、これを引くと案の定と云うべきか、天井が音を立てて動きその頭上から弱々しい光が差したのが見えた。さっさとこんな隙でもない通路はおさらばしよう。英一は奏美を先に登らせ、自分は後を追う者がいないかを監視しつつその背中に続いた。しかし奏美はセーラー服姿なのでスカートの中身を安易に見ない様にするにも英一は気を遣わねばならなかったのだった。